

NEOREAL WONDER

NEXT UPDATE

4 Apr

5 May

Milano Salone 2011 4 / 12 - 17

NEW

Report

NEW

Movie

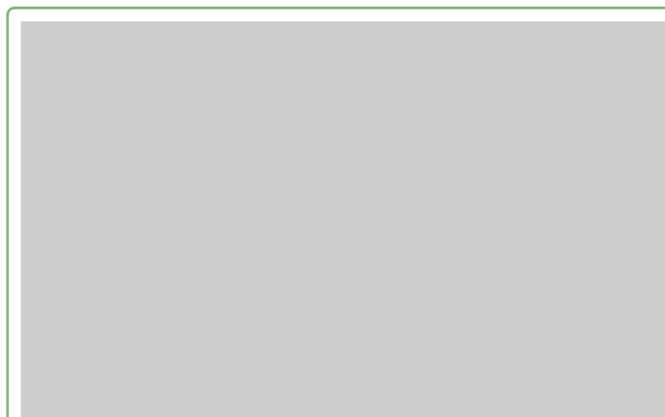
NEOREAL WONDER 2011

Visitor's Information

Archive

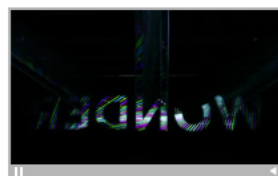
Canon Products

Photo Gallery



NEOREAL WONDER ART WORKS1 (曲面スクリーン / ノーカット版)

WOWが制作した映像作品をノーカット版でご覧いただけます。巨大な曲面スクリーンに投写される繊細さと躍動感のある映像をお楽しみください。



NEOREAL WONDER ART WORKS2

(光束スクリーン / ノーカット版)

トラフがデザインした光束スクリーンに、WOWの映像が色を添えます。会場での感動をもう一度ご堪能ください。

movie

ミラノデザインウィーク会期中の会場の様子をご覧ください



Communication

37

ツイートする

27

いいね!

Report

- Producer's Report
- TORAFU ARCHITECTS's Interview
- WOW's Interview
- LUFTZUG's Interview

Imaging system engineer's interview

LUFTZUG by Yutaka Endo

アイデアやひらめきを表現として成立させたキーパーソンに迫る！

—初めての挑戦だったと言う光束スクリーンでの投写はいかがでしたか？

遠藤：平面のない立体的なスクリーンへの投写だったので、細い一本一本の糸に対して、ただ光を当てるということではなく、映像として体感的・効果的に成立させるための工夫を重ねました。東京で仮組み実験における試行錯誤の末にプロジェクターの台数を増やすことを決めました。側面、上下から3台のプロジェクターで挟んで投写することで、デジタルな3D表現ではなく、リアルな立体として認識できるような投写方法を導き出すことができました。また、始めは、糸だけに投写しようと試みましたが、プロジェクターの性能が良く、奥の文字がある壁に光が当たってしまう点についても、積極的に捉え、洩れてしまった光としてではなく、映像空間としてコントロール・演出できるよう、ぼんやりとしたマスクをかけることにしました。



東京での仮組み実験の様子 光束スクリーンの投写調整を行うルフトツーク遠藤氏

—トラフとWOW、ルフトツークの3者間の調整をどのように行いましたか？

遠藤：デザイナーからアイデアが出てきた際に、物理的に出来ないという選択肢に至らぬ様、技術と表現をつなげ、アイデアやひらめきを融合させて表現として成立させることが大事だと思っていました。スクリーンを映像が投写されるだけのものではなく、光の受光体として捉えた時、空間を明るくし、見ている人のシルエットが浮かび上がることも含めて、全体の空間づくりを共有できるような投写方法を考え、機材の台数や設置方法を提案しました。また誰も見たことがない空間を作ることに対するイメージ共有のため、何度も議論を重ねました。スクリーンをある定点からみるということではなく、どんだん空間中部に入っていく体験するというインストールにしたいというのが、トラフ、WOWの狙いだったので、そのための投写を考えました。



曲面スクリーンの調整を行うWOWとルフトツーク 投写状況を確認するトラフ館野氏と遠藤氏

—今回キヤノン製品を使用してどんな工夫をしましたか

遠藤：解像度の低いプロジェクターで投写すると単なる光にしかならないのですが、今回使用したWUX10 Mark IIとSX80 Mark IIは、高精細な密度の濃い映像を投写することが出来るので、このような特殊な投写面に対して、映像として明確な像を結ぶことができました。また、映像コンテンツの素晴らしさを表現するために、WOWさんから、二面のスクリーンを両サイドに設置し、人の動きを促す流れを作りたいという提案が出されたため、パワープロジェクターWUX4000という輝度が高いプロジェクターをそこに使用することにし、繊細なブレンド、歪み補正を可能にするための調整システムを作り、WOWさんもこのプロジェクターだからこそ生かせる繊細な映像演出を仕上げました。設置環境に関しても限られた空間の中でのことなので、複数台のプロジェクターをつなげ、マルチプロジェクションをすることで、映像に包まれているような、今まで体感したことのないような空間になったと思います。プロジェクターの機能を最大限に生かし、クオリティを落とさないように調整していくことは、難しかったです。やりがいもありました。ただ最新技術ということだけでなく、新しい発想の技術が重要だと思っていて、それぞれの機材の特性にあったものを作っていくように心がけています。



曲面スクリーンには、パワープロジェクターWUX4000を用いて高精細な映像を投写 光束スクリーンへの投写は液晶プロジェクターWUX10 Mark IIとSX80 Mark IIを使用

写真：大木大輔

LUFTZUG

遠藤豊率いるルフトツークは、映像演出及びパフォーマンスを中心に、企画、プロデュース、運営、総合的なアートディレクション、システム開発、出版、アーティスト・企業・運営団体のためのテクニカルスタッフ・機材のコーディネートを行うインディペンデントレベルでありクリエイティブプロダクションです。